中国における「日本語の国際化」——中国日本語観調査より

劉　　志　明*

はじめに

日本の国際化が進む中で，世界各国において日本語が急速に普及しはじめている。しかし，それにともない，様々な問題が提起されている。現在，国際社会で日本語がどの範囲でいかに使用されているのか，人々は日本語に対して，どのような意識を持っているのか，日本語の普及や日本語による海外への情報発信および日本人と外国人との言語習慣の差異に起因する文化摩擦はどんな問題を抱えているのか。これらの問題を解明するため，文部省科学研究費(創成的基礎研究費)「国際社会における日本語についての総合的研究」(略称：新プロ「日本語」研究代表者　水谷　修)という研究プロジェクトが実施されている。この研究で得られる成果は，言語研究の世界だけではなく，日本の国際協力，他の国々との経済・文化交流の拡大，他の人文科学および社会科学の発展に寄与するところが大きいと考えられる。

研究の内容は，「日本語国際センサスの実施と行動計量学的研究」(研究班1　班代表者　江川清）をはじめ，「文化摩擦」「実験言語」「情報発信」など4つに区分される。「新プロ日本語」研究班1の「日本語国際センサス」は，多くの国で実施される予定であるが[1]，その準備作業の一環として，1995年1月から3月にかけて，中国で「中国人の日本語観に関する調査」(以下は「日本語観調査」と略称)

1．江川清「新プロ『日本語の国際化』の研究方向について」『日本語学』明治書院，1994年12月号，11-17ページ。

＊　神戸大学大学院国際協力研究科助教授

と「中国における日本留学経験者の意識に関する調査」(以下は「留学経験者調査」と略称)を実施した。

「日本語観調査」の内容は大きくこのように分かれる。(1)日本語観(日本語の重要度に対する評価，日本語の学習動機，日本語の難易度，好き嫌いなど日本語に対するイメージなど)，(2)日本語学習状況(日本語および他の外国語に対する学習の有無，日本語学習の学習条件・日本語能力に対する評価)，(3)日本語および日本情報に対する接触状況(日本語に対する接触度，日本語の中国語への影響に対する認知)，(4)日本観(日本に対する好感度・理解度，日本・日本人に対するイメージなど)。「留学経験者調査」は，質問内容の一部が「日本語観調査」と共通するほか，日本留学の目的，日本留学時の日本語学習環境・問題点，留学前後の日本語能力，対日好感度・イメージの変化などの質問をかえた。

以下は，今回の調査の結果に対する初歩的な分析を通じて，中国における人々の日本語に関する意識の構造を検証し，日本語の普及に影響する要因を考察する。

Ⅰ．中国における日本語観の構造

1．日本語の普及

中国の日本語教育は，その教育機関と対象によって，正規の学校教育(小・中学校，大学)，社会人向けの成人教育(放送大学，夜間大学，大学の通信教育など)，日本語学校，企業の日本語教育などに分けられる。

中国の大学の日本語教育は，大きく二つの方式に分けられる。一つは日本語専攻で，大学の日本語学部・日本語学科で，基礎から専門として日本語を学習する。もう一つは日本語非専攻で，他に専門分野を持つ学生が必修科目(第1外国語として学習)あるいは選択科目(第2外国語として学習)として日本語を学習する。

日本語専攻について，中国国家教育委員会の統計によると，1993年，全国で日本語学科を設置する大学は95校で，学生の数は7952人で，3年前と比べて，それぞれ16校と1898人増えた。日本語を専攻する学生のうち，大学院生185人，学部生は5426人，短大生2341人である。

日本語非専攻について，中国日本語教学研究会の調査によると，1991年現在，全国1075校の大学のうち,半数近くで日本語の授業(共通日本語)が開設された。学生数は72000人以上に達していた。日本語を第1外国語として学習する学生と，第2外国語として学習する学生の比率はほぼ4対6である。

大学の日本語教育以外で，中学校と高校では，日本語の授業を開設しているのは約600校で，学生数は約16万人である。成人教育のさまざまの社会大学の中で，約40校は日本語の授業あるいは学科を開設し，学生数は3000人以上に達する。

そのほかに，日本語学校，日本留学ための日本語養成班，ラジオ・テレビの日本語講座など数多くがあり，学習者数は10万人以上に達している。全体的には，正規学校教育以外のところで，日本語を勉強する人が多い[2]。

中日両国の経済交流とくに日本企業の対中投資の拡大は，中国における日本語の普及を促進する重要な要素の一つである。1994年と1984年とを比べると，投資件数は138件から3018件に，投資金額は2.03億ドルから44.4億ドル(契約ベース)に増えている。現在，操業している日系企業が数千社に達している。

日本企業の進出によって，日本語ができる人材への需要が増える一方である。中国国家教育委員会の調査によると，日本企業の進出が目覚ましい上海では，日本語学科の求人倍率が10数倍を超えている[3]。このような状況はさらに人々の日本語学習の意欲を高めている。

そして，中国に進出している日本企業は，社員を対象に積極的に日本語教育を行っている。ガーデンホテル上海の場合，中国人従業員はあわせて1050名である。毎週，日本語は6クラス，英語は2クラスを用意して，従業員に外国語を勉強するチャンスを与えている。そして，年に4回試験を実施し，試験の成績によって「基本的な会話ができる社員」「一般的な会話ができる社員」「かなり専門的な会話ができる社員」という等級をつけ，名札にその等級を示す星をつけさせている。日本語は赤い星，英語は青い星，「基本的な会話ができる社員」には星を1つ，「一般的な会話ができる社員」には星を2つ，「かなり専門的な会話ができる社員」には星を3つ与える。この等級には手当がついていて，青い星1つだと60元，2つだと90元の手当がもらえる。習得が難しい日本語は2割増しの計算で，赤い星1つだと72元，2つだと108元の手当がもらえる仕組みである[4]。日系企業の多い大連では，「日本語を話し，理解する人が多い。そしてこれは戦前教育を受けた人たちばかりでなく，若い人たちも同様である」「街の日本語学校はいずれも盛況をきわめている。市役所などでも10人1人は完璧に日本語を完全に理解している」になっている[5]。

2．日本語学習者の構成

「日本語観調査」によると，日本語を勉強している社会人の場合，日本語を第1外国語とする人は26.3%にすぎない。7割以上の人が日本語を第2外国語としている。

日本語学習者の内訳から見れば，男性は女性よりやや多い。年齢別には，20代と30代は他の年齢層と比べて，日本語学習者の割合が高い。職業別には外資系企業の職員が最も高い(67%)，次いで，企業管理職45.5%と専門職42%である。学歴から見れば，大卒は51%で，高卒は32.9%で，中卒は12.1%である。民族別に見るとモンゴル族，満族，朝鮮族の日本語学習の比率が漢民族より高い。

外国語の学習は，その教育環境および学習条件の制約を受けている。調査では，多くの人が日本語の学習環境・条件は英語より悪い

2．王宏「全国日本語教育機構調査総合報告」『中国日本語学年鑑』科学技術文献出版社，1992年，403-415ページ。
3．中国国家教育委員会の1993年の調査により
4．中国ビジネス大競争時代『中央公論』平成7年10月号臨時増刊，286ページ。
5．前丸紅駐中国総代表　中藤隆之著『中国はいま』ダイヤモンド社，1992年，97-98ページ。

と答えている。とくに，日本語を第2外国語として勉強する人は，日本語を第1外国語として勉強する人より，社会人は学生より，日本語学習の環境が厳しいことがわかる。

日本語学習者の日本語学習環境に対する不満は，主に「日本語会話を練習する相手がいない」「日本語の先生が不足」「日本語の教科書・参考書が少ない」との三つの問題に集中している。

表1　日本語学習環境に対する不満　(%)

	学生	社会人
1.日本語の先生が不足	46.1	41.6
2.先生の日本語のレベルが低い	2.9	5.3
3.日本語の教科書·参考書が少ない	46.1	31.9
4.日本語学校が少ない	23.5	34.5
5.ラジオ·テレビの日本語講座が少ない	35.3	26.5
6.日本語会話を練習する相手がいない	56.5	46.9

3．日本語学習の動機

日本語学習者がなぜ日本語を選ぶのか，その学習動機は英語など他の外国語学習者と比べてどこが違うのか。

まず，英語を第1外国語とする人の外国語の学習動機について，「学校の指定する必修科目だから」は56.3%で最も多く，ついで「進学のため」は36.3%である。それに対し，日本語を第1外国語とする人は，「学校の指定する必修項目だから」と「進学のため」を日本語学習の目的とする人はそれぞれ9.7%と13.9%しかなく，もっとも多いのは「現在の仕事・研究上の必要があるため」で，52.8%を占める。ついで「将来性があるから」36.1%，「日本の近代的知識を身につけるため」31.9%，「いい職につけるから」29.2%である。

ここで，英語と比べて，日本語が主に実用性と将来性の面で重視されて，進学や学校の専門教育における日本語の役割があまり重要視されていないことがうかがえる。

次に，日本語を第1外国語とする者は日本語を第2外国語とする者より，「日本へ留学したいため」を日本語学習の目的にする人が多い。前者が23.6%で，後者が12.7%である。そして，「現在の仕事・研究上の必要があるため」と「将来性があるから」を選んだ人の比率は前者が後者よりずっと高い。

職業別でも，その学習動機について大きな違いが見られる。外資系企業の職員，企業管理職および専門職が，日本語を勉強する目的を「仕事・研究上の必要があるため」としているのに対し，学生は主に「将来性があるから」と「いい職につけるから」に関心を持っている。

表2　職業別日本語学習希望者の学習動機

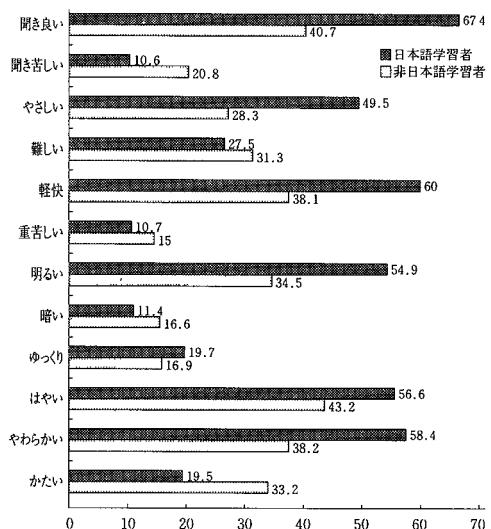
(%)

	技能・労働職	専門職	会社員	企業管理職	学生
1.進学のため	3.0	3.4	2.7	5.1	6.9
2.学校の指定する必修科目だから	0	3.4	1.8	0	10.9
3.日本へ留学したいため	1.5	15.5	6.2	7.7	12.5
4.いい職につけるから	10.4	1.7	22.1	2.7	32.8
5.日本の近代的知識を身につけるため	9.0	20.7	19.5	23.1	30.6
6.日本の文化を理解するため	10.4	14.7	14.2	10.3	29.7
7.仕事・研究上の必要があるため	10.4	28.4	43.4	35.9	29.1
8.趣味として	14.9	15.5	21.2	17.9	26.9
9.日本がすきだから	10.4	3.4	7.1	10.3	12.8
10.将来性があるから	11.9	6.0	10.6	2.6	36.9
11.学びやすいから	1.5	1.7	5.3	2.6	3.4

図1　日本語に対するイメージ

4．日本語のイメージ

「日本語観調査」では，「日本語」のイメージについて，「聞きよい―聞きにくい」「やさしい―難しい」「軽快―重苦しい」「明るい―暗い」「ゆっくり―はやい」「柔らかい―硬い」という反対語で構成された6つの形容詞の対で評定してもらった。調査結果から，日本語学習者と非日本語学習者の日本語のイメージは大きく違っていることがわかる。

全般的には，日本語学習者は非日本語学習者と比べて，日本語に対するプラスのイメージが強いことがわかる。とくに「聞きよい」と「軽快」など項目で大きな差が見られる。

Ⅱ．留学経験者の日本語意識

1．中国人の日本留学(就学生と研修生を含む)の推移

戦後，中国人の日本留学が開始されたのは，1972年国交正常化以降のことで，73年末に外交部の職員など7人が和光大学に入学したのがその最初である。その後，毎年10名前後の中国人留学生が日本語習得の目的で，日本へ派遣された(受け入れ大学は立教大学，創価大学，東京および大阪の外国語大学などである)。1977年には，東京大学大学院に理工，農学専攻の学生7人が派遣された[6]。

中国政府による日本への留学生派遣が本格的に実施されたのは1978年のことで，同年7月中国政府は「四つの現代化」の一環として

6．阿部　洋「日中学術文化交流」『中国総覧』1982年版　財団法人霞山会刊，455-461ページ。

日本や欧米諸国に大量の留学生を派遣する計画を打ち出した。文部省の発表によると，1980年1月現在，中国政府派遣留学生は，375名に達して，これを専攻別にみると，理工系298名，医学系42名，農水系13名，日本語専攻22名であった。

留学予備生の日本語教育を強化するため，79年3月，長春の東北師範大学内に「赴日留学生予備学校」が開設された。そこで，渡日前の1年間日本語などの予備教育を行ったことである。それに対して，日本側は，国際交流基金から日本語教師7名を派遣して，これに協力した。

80年代半ばころまで，中国人の日本留学は中国政府から奨学金を出す公費留学生が主で，私費留学生の場合はほとんど日本に親戚縁者がいるケースに限られていた。1984年12月，国務院は「自費留学に関する暫行規定」を公布した[7]。この規定により，「正当な合法的手続きで外貨による費用援助を受けられる者，あるいは国外の奨学金を受ける者は，学歴，年齢，勤務年数を問わず」私費留学が認められることになった。ちょうどその前後，中曽根前首相の「留学生10万人受入れ計画」(1983年)や就学ビザの手続きの簡略化(1984年)などがあり，日本への留学者の数は急増し，日本留学ブームが始まった。しかし，日本語学校や就学生問題をめぐってトラブルが多発したため，このブームがいったん沈静化した。90年代に入って，留学生の新規入国者数が総じて安定に推移してきたが，就学生の人数が大きく減った。それに対し，研修生が大幅に増えた。

表3 留学・修学・研修生新規入国の推移

	留学	就学	研修
79	151		1713
80	450		3144
81	453		3021
82	580	113	1217
83	491	160	1495
84	438	251	2122
85	943	1199	2541
86	1178	2126	2848
87	1350	7178	2688
88	1626	28256	3840
89	2242	9143	3496
90	2632	10387	7642
91	2498	8099	10668
92	2860	16263	15054
93	2909	9162	15688
94	2561	4415	14750

出所）法務省「出入国管理統計年報」をもとに作成

文部省の調査によると，1994年現在，大学院，大学学部と短期大学に在籍している中国人留学生は，大学院9152人(男5892人，女3260人)，大学学部14578人(男7740，女6838)，短期大学1163人(男223人，女940人)，高等専門学校12人で，計24905人である。

2．日本留学経験者の構成

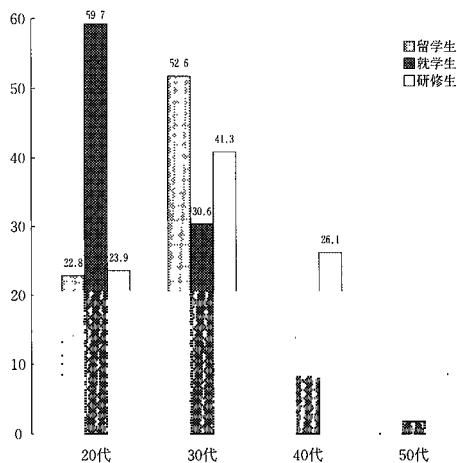
「留学経験者調査」の対象は留学生，就学生と研修生経験者からなっている。調査の地域から見れば，上海は就学生が圧倒的に多い。内陸部の西安は留学生の比率が高い。北京の場合は短期研修生が比較的に多い。

性別の構成から見れば，留学生経験者の場合は男性61.7%，女性38.3%，男性は女性よ

7．『人民日報』1985年1月12日。

り2割多い。就学生と研修生経験者の男女比率もほぼ6対4である。学歴では，就学生経験者の2割以上は高卒以下であることがわかる。

年齢別から見れば，就学生経験者は20代が多いに対し，留学生経験者は30代がもっとも多い。

図2　年齢別留学・就学・研修生の構成

日本に行った回数について，1回は73.6%，2回は18.3%，3回以上は8.4%である。日本での留学時期としては，90年以降は57.9%，もっとも多く，次いで，85年から89年までで37.6%，84年前の留学した人は4.1%しかいない。日本での学習期間について，半年以下の研修は31.6%，半年以上1年未満は18.7%，1年以上2年未満は29.2%，2年以上3年未満は12.9%，3年以上は7.6%である。

3．留学と日本語能力の向上

(1)留学前の日本語学習

留学前に，日本語を習ったことがある人は73.6%である。年齢別から見ると，20代は87.9%，30代は77.8%，40代は80.8%，50代は66.7で，20代以上の人の日本語の習得率が高いことがわかる。

「あなたはなぜ日本語を選んだのですか」という質問に対して，「仕事・研究上の必要があるため」は31.8%で，もっとも多い。「日本へ留学したいため」は25.1%，第2位を占める。一般の日本語学習者と比べて，日本留学経験者の中で，日本への留学という明確な目的をもって日本語の勉強をはじめた人が多いことがわかる。次いで，「学校の指定する必修科目だから」19.0%，「日本の近代的知識を身につけるため」17.9%，「将来性があるから」15.1%，「いい職につけるから」11.7%という順である。

日本語を勉強したところについて，もっとも多いのは大学(39.1%)である。次いで「一人で勉強した（独学)」(25.1%)，「在職の日本語研修」(22.9%)，「日本語学校」(9.5%)という順である。小・中学校で日本語を勉強したことがある人は5%を占める。

年齢別から見れば，20代から40代までは大学で日本語を勉強した人がもっとも多いが，50代は独学を中心にしたことがわかる。

表4　日本語を勉強したところ　(%)

	20代	30代	40代	50代以上
小学校	3.0	0	0	0
中・高校	9.1	1.4	0	0
大学	39.4	41.7	38.5	11.1
日本語学校	10.6	5.6	11.5	22.2
在職の日本語研修	19.7	25.0	30.8	22.2
一人で勉強した	25.8	25.0	19.2	44.4

日本語の学習環境について，半分近くの人が英語より悪いと答えた。主な問題点として，「日本語会話を練習する相手がいない」47.4%，「日本語の教科書・参考書が少ない」29.5%，「ラジオ・テレビの日本語講座が少ない」28.2%，「日本語の先生が不足」17.9%などが挙げられた。

(2)日本語レベルの向上

日本留学帰国者は，日本での生活，勉強を通じて，日本語の能力をどの程度向上させたのか。これについて，調査対象に，留学前後の自分の日本語能力の変化を「読むこと」と「話すこと」両方から評価してもらった。

読む能力は「案内表示がわかる程度」「仕事に必要な決まりきった表現がわかる」「書かれたものの中身見当がつく程度」「書物が不自由なく読める」「完璧に(母国語と同じように)」など5つの段階，話す能力は，「あいさつ程度」「商売，仕事に必要な決まりきった表現がわかる」「日常会話ができる」「専門的な話もできる」「完璧に(母国語と同じように)」など5つの段階に分けられた。

その結果，留学前の日本語能力について，大半の人は初級段階に止どまったことがわかる。日常生活に適応できる言語力を持つ人は4割未満で，専門的な研究に適応できるのは2割以下しかなかった。言語力はもっとも低かったのは就学生経験者で，その8割以上の人は，日本語の読む能力が初級段階にとどまった。研修生経験者の場合は，読む能力について，初級段階と中級以上の段階は6対4であった。留学生経験者の場合は，言語能力が専門研究に適応できた人は半分くらいを占めた。

調査結果から見れば，大半の人は留学を通じて，日本語能力が大きく進歩したことが分かる。まず，読む能力について，第1段階の減少と第4段階の上昇は非常に目立っている。

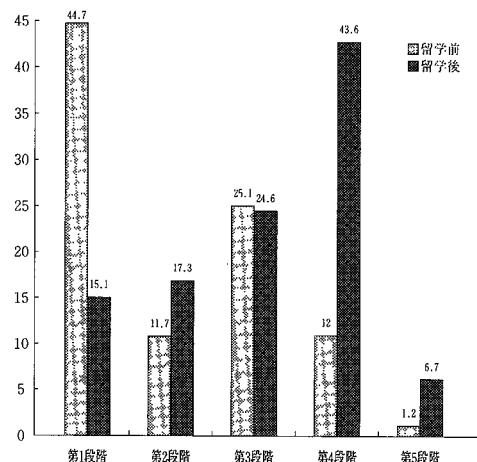
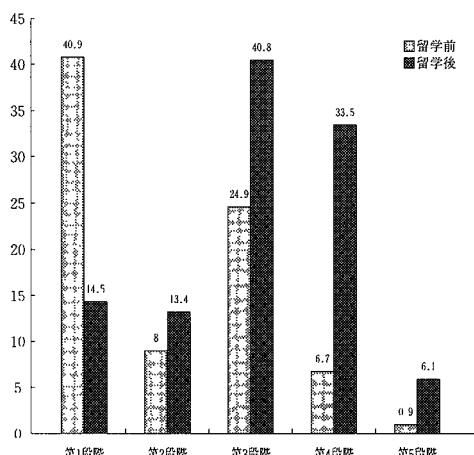
図3　留学前後の日本語の読む能力の変化

留学前は，半分近くの人の日本語の会話力は，日常生活にさえ適していなかった。専門的な話ができるは１割未満であった。全体的には，人々の話す能力が読む能力より低かった。留学を通じて，８割の人の「話す」能力は，中と中の上の段階に達するようになった。その進歩の幅は読む能力より大きかったことがわかる。

図４　留学前後の日本語の話す能力の変化

留学を通じて，日本語能力の進歩がもっとも大きかったのは20代である。読む能力の場合，「案内表示がわかる程度」は４割から１割へと減少し，その代わりに，「書物が不自由なく読める」など第４段階以上の程度に達した人は２割から６割へ増えた。会話力の場合，「あいさつ程度」の人は4割から1割に減少し，「専門的な話もできる」など第４段階は１割から４割まで増えた。

(3)日本での日本語学習環境に対する評価

調査では，日本留学時の日本語学習環境について，７割を超えた人は「いい」と評価した。しかし，２割近くの人がさまざまの不満を持っていることがわかる。

大学でとくに大学院で勉強した留学生の日本語の学習環境は，就学生や研修生と比べて，非常に恵まれていたことがわかる。

表５　在籍教育機関別に見る日本語学習環境に対する評価　（％）

	非常にいい	まあいい	なんともいえない	あまりよくない	非常によくない
日本語学校	6.8	59.1	18.3	13.6	2.3
専門学校	16.7	58.3	12.5	12.5	0
大学学部	21.1	57.9	5.3	15.8	0
大学院	25.0	70.0	5.0	0	0
企業・研究所	12.2	48.8	9.8	19.5	7.3

日本語での日本語学習環境に対する不満は「日本人と会話を練習するチャンスが少ない」46.7％，「日本語を勉強する時間が少ない」26.7％，「留学生ための日本語授業が少ない」16.7％などがあげられた。

４．留学の成果に対する評価

(1)日本留学の動機

日本留学の動機について，「日本の近代的知識と技術を身につけるため」と答えたものがもっとも多い。第2位は「日本語を勉強するため」である。

年齢別には，留学の動機の違いが見られる。

若い人の多くは近代知識の勉強より日本語の勉強や日本での就職および高収入を得ることに興味を持っていることがわかる。

表6　年齢別に見る留学の目的の違い　(%)

	20代	30代	40代	50代以上
日本の近代的知識と技術を身につけるため	16.7	51.4	57.7	88.9
日本語を勉強するため	25.8	19.4	23.1	11.1
日本の文化を理解するため	15.2	15.3	26.9	11.1
高い収入を得るため	15.2	9.7	0	0
新しい環境でチャレンジしたい	18.2	9.7	7.7	0
将来日本で就職あるいはビジネスをするため	13.6	8.3	0	0

そして,「高い収入を得るため」を日本留学の主な目的とする就学生が,留学生と研修生と比べてずっと多いことがわかる。

表7　留学生・就学生・研修生の留学の目的の違い　(%)

	日本語学校	専門学校	学部	大学院	企業・研究所
日本の近代的知識と技術を身につけるため	15.9	12.5	57.9	85.0	55.3
日本語を勉強するため	45.5	41.7	21.1	15.0	4.3
日本の文化を理解するため	13.6	16.7	23.7	20.0	6.4
高い収入を得るため	22.7	8.3	2.6	0	4.3
新しい環境でチャレンジしたい	15.9	33.3	10.5	5.0	8.5
将来日本で就職あるいはビジネスをするため	11.4	12.5	0	5.0	6.4

(2)留学の成果に対する評価

留学の成果について,「いい」と評価した人は8割に達した。それに対し,「よくない」(「あまりよくない」は6.9%,「非常によくない」は0.6%)と答えたのは7.5%しかない。

留学の成果に対する評価は,留学生が最も高く,次は就学生で,研修生の評価が最も低いことがわかる。

表8　在籍別に見る日本留学の成果に対する評価

(%)

	非常にいい	まあいい	なんともいえない	あまりよくない	非常によくない
留学生	19.7	73.8	3.3	3.3	0
就学生	12.9	61.3	17.7	6.5	1.6
研修生	6.8	68.2	15.9	9.1	0

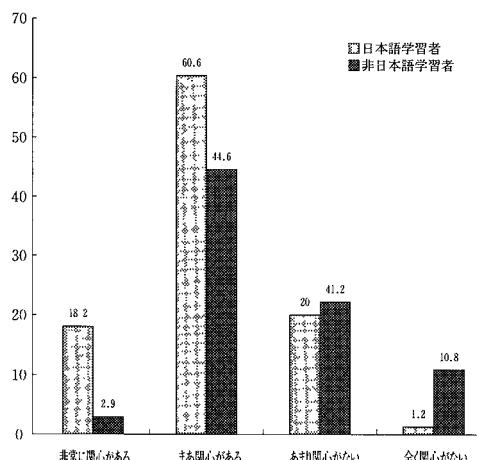
9割以上の人は日本留学で学んだ知識は現在の仕事に役立っていると答えた。とくに学生と専門職が日本での留学の成果に対する評価がもっとも高い。

「あなたの仕事・研究および生活の中で,日本語がどの程度使われますか」という問いに対して,7割以上の人が「よく使われる」「時々使われる」と答えた。

Ⅲ．日本語の学習と対日イメージ

1．日本に対する関心

日本に対する関心度が,日本語学習者は非日本語学習者よりずっと高い。「日本語観調査」では,「あなたは日本に対し関心を持っていますか,それとも関心を持っていませんか」という質問に対して,「関心を持っている」と答えた日本語学習者は8割に達しているのに対して,非日本語学習者は5割未満に止どまった。

図5　日本に対する関心度

2．日本語に対する接触度

「日本語観調査」によると，一般市民の場合，日本語に接したことがある人は9割に達している。そのうち，日本語を見たことがある人は92.6%，日本語を聞いたことがある人は89.4%，日本語に対する接触度が非常に高いことがうかがえる。

日本語学習者と非日本語学習者と比べて，日本語の本・教科書，新聞・雑誌など活字メディアを利用して日本語の文字に接触する度合がずっと高いが，テレビ，映画，広告などメディアに対する接触度について両者の差があまり見られない。

表9　日本語を見るところ　(%)

	日本語学習者	非日本語学習者
テレビ番組で	62.2	54.2
映画で	50.6	44.4
広告で	48.9	43.0
新聞・雑誌	52.2	30.3
日本の漫画で	42.8	30.7
日本語の本・教科書で	86.7	37.5
商品の取扱説明書で	68.3	57.3
街頭や店の看板で	45.6	28.5
その他	8.3	1.1

日本語を聞くところについて，人的な接触は日本語学習者は非日本語学習者よりずっと多いが，放送・映像メディアなどに対する接触度の差があまりない。日本語の歌はどちらにとっても日本語に接する重要なチャンネルである。

表10　日本語を聞いたところ　(%)

	日本語学習者	非日本語学習者
テレビ・ラジオの日本関連の報道番組で	36.1	22.7
ラジオ・テレビドラマで	32.8	27.4
ラジオ・テレビの日本語教育番組で	68.9	36.8
映画で	41.7	33.6
コマーシャルで	34.4	23.1
街頭や店のアナウンスで	18.9	7.6
日本語の歌	67.2	56.0
直接に日本人が話しているのを聞いた	72.2	29.6
日本語を使っている中国人	55.6	34.7
その他	3.3	0.7

以上の結果から見れば，放送メディアとくにテレビは，人々の日本語に接するもっとめ重要な情報源であることがわかる。

テレビにおける日本語に関する情報は，(1)

テレビニュース番組，(2)ドキュメンタリー，(3)中国の制作した日本関連のテレビドラマ・映画，(4)日本から輸入されたテレビ番組，(5)日本のコマーシャル，(6)日本語教育番組などによって構成されている。

1970年代末から，中国は積極的に日本などからテレビ番組を輸入してきた。1990年までに，放送された日本の連続ドラマは38部に達している。1993年の統計では，全国累計で約10万８千時間分の外国からの輸入番組を放送しているが，このうち，日本からの分は約１万５千時間（約７％）であった。これらの輸入番組は，人々の日本語に接する重要な情報源である。

テレビの日本語講座は，1984年中央テレビに放映された『日本語を学ぼう』から始まったのである。これらの番組は，日本の風景，日本人の日常生活などを詳しく紹介したため，日本語学習者だけではなく，一般の視聴者がこれを日本理解の情報源として興味を持っている。

３．日本語の中国語に対する影響の認知

「日本語観調査」と「留学経験者調査」の中で，「ふだん，あなたが日常生活で使うことばの中で，あるいは周りの人が使うことばの中で，日本語から伝わったと思われることば(単語)がありましたら書いて下さい」という自由式の共通質問がある。

統計結果に対する集計から，人々に日本語からの外来語と思われることばは以下のように分類できる。

(1)「カラオケ」「写真」「ワイシャツ」「髪屋」など日本の製品あるいは消費文化に関連する用語。これらのことばの流行は，中国の生活様式の変化に対する日本の経済的・文化的影響を示したものといえる。

(2)「料理」「畳」「寿司」「便当」「鉄板焼」「和服」「相撲」「新幹線」など日本の独特の物事に関連する言葉。その中で，日本料理などに関連することばに対する認知度がもっとも高い。これは，近年の日本の飲食店などの中国進出による影響が大きいと考えられる。

(3)「経済」「幹部」「哲学」「経済」などずっと昔からすでに中国語で定着した日本語からの外来語。これらの言葉に対する認知率は日本語学習者のほうが圧倒的に高い。

(4)「米西，米西」(メシメシ)，「開路」(カエロー)，バカヤロー，「死拉死拉的」(殺すぞ)，「花姑娘」など戦争映画の中で，旧日本軍兵士がよく使うことばは，日本語がわからない一般市民にもっとよく知られた「日本語」である。

(5)「松下」「東芝」「日立」など日本商品のブランド名。中国での日本商品の普及率が非常に高い。日本の商品のブランド名はその商品の代名詞として広く使われているため，これを日本語からの外来語と理解する人が少なくない。

(6)「営業中」「新発売」「会社」「専売店」など日本企業の進出によってもたらしたビジネスの関連用語。

(7)「沙約那拉」(さよなら)，「請多関照」(どうぞよろしく)，「初次見面」(はじめま

して）など日本的あいさつ。これらの言葉の中で，音訳されたものがあれば，意訳されたものもある。

(8)そのほかには，「族」「留守」「人気」など近年になって日中文化交流の拡大によって，文学作品によく登場する言葉があげられた。

この質問に対する回答状況は，調査対象と調査地域によって大きな違いが見られる。まず，回答率は，日本語学習者（日本語を勉強している学生と日本留学帰国者を含めている）は他の調査対象より，上海，大連（経済・文化の面で，日本とのつながりがもっとも深い地域）は他の地域とよりずっと高い。

次は，回答の内容について，日本語学習者や留学経験者は，現代用語に関連する答えが多いのに対し，内陸部や農村地域の人々の答えは主に日本関連の映画に出た言葉に集中している。

表11　中国語における日本語からのことばに対する認知　（回答者人数）

	日本語学習者	一般学生	市民	合計
カラオケ	64	16	36	116
料理	75	5	12	92
幹部	48	7	14	69
米西（メシ）	2	28	17	47
松下	5	11	22	37
バカヤロー	3	19	14	36
畳み	16	10	6	32
請多関照	6	15	8	29
さよなら	2	19	5	26
東芝	5	7	14	26
写真	22	0	0	22
経済	20	0	2	22
日立	1	7	14	22
株式会社	12	2	6	20
哲学	18	1	1	20
髪屋	16	1	0	17
社会主義（社会）	16	0	0	16
ワイシャッツ	0	0	15	15
寿司	4	0	10	14
はい	3	6	4	13
約西（ヨシ）	1	7	4	12
営業中	10	0	0	10

4．対日好感度

「日本語観調査」では，日本語学習者の日本に対する好感度は非日本語学習者よりずっと高いことがわかる。

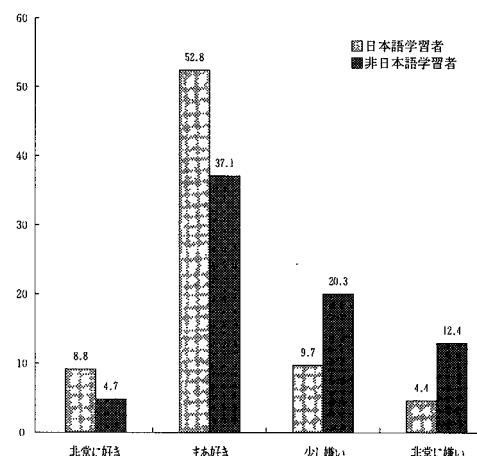
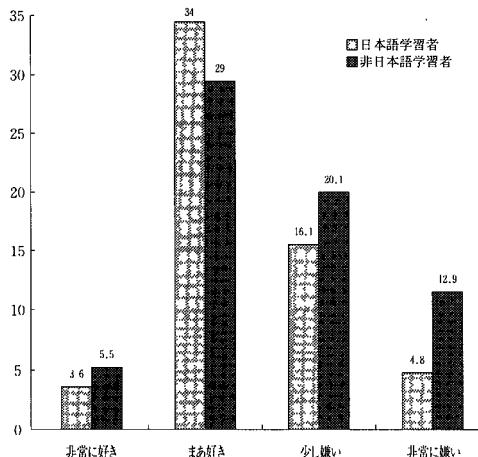
図6　「日本」に対する好感度

「日本」に対する好感度と比べて，「日本人」に対する好感度がずっと低くなり，しかも日本語学習者と非日本語学習者との差が小さくなった。

図7　「日本人」に対する好感度

「留学経験者調査」でも，「日本人好き」が「日本好き」より低くなる傾向が見られる。「日本人好き」は4割未満で，「日本人嫌い」は3割近くなっている。

日本に対する好感度は，日本での滞在時間とは緊密な相関関係が見られる。日本での滞在時間が長ければ長いほど対日好感度が高くなる。そして，日本語学校と専門学校の学習経験者は留学生と比べて，「日本嫌い」の割合が高くなったことがわかる。

おわりに

以上の「日本語観調査」と「留学経験者調査」との二つの調査の結果に対する初歩的な分析から，中国における人々の日本語に対する意識について，以下の傾向が指摘できると思われる。

1．中国における外国語教育の中で，日本語は英語に次いで第2位の地位が確立されているが，日本語の習得・学習人口の構成は，地域，民族および調査対象の年齢，学歴，職業によって大きな違いが見られる。全体的には，日本語学習者が主に東北地方，大都市に集中して，そして，若い年齢層，高学歴層および朝鮮族，モンゴル族の日本語学習の割合が他の階層および民族より高いことがわかる。

2．日中交流とくに経済関係の拡大は中国における日本語の普及に影響する重要な要素の一つである。日本企業の中国進出によって，日本語ができる人材に対する需要が高くなり，人々の日本語学習意欲に大きな刺激を与ている。日本語学習者の多くは，主に日本語の経済的な実用性と将来性に関心を持っている。

3．中国における日本語教育の行方について，以下の傾向が推測できる。すなわち，中学校，大学など正規の学校教育の中で，日本語を第1外国語として学ぶ学生の割合が低下し，日本語を第2外国語として選ぶ人が大きく増えるだろう。そして，日本語学校，成人教育，通信教育，職場内の日本語研修など正規学校以外の日本語教育機構がもっと重要な役割を果たすようになると考えられる。

4．日本留学経験者は，中国における日本語教育・日本研究の非常に重要な一翼を担っている。しかし，日本留学経験者の中で，留学前の日本語の能力の不足で，留学の成果が大きく影響された人が少なくない。今後，日

本の留学生受け入れ政策の見直しの必要が迫られる。

5．調査では，日本語の学習は対日感情にプラスの影響を与える傾向が見られる。これまでの調査から見れば，人々の対日感情はあまり良好ではなく，しかも，人々の日本に対する関心が主に経済や科学技術に集中し，日本文化に対する理解が非常に不足している[8]。このような状況で，日本語の普及は，人々の対日理解を促進する懸け橋になると考えられる。

謝辞

本調査は，国立国語研究所情報資料研究部江川清部長，米田正人室長，関西学院大学真鍋一史教授，東京外国語大学井上史雄教授と筆者を中心に行われている。新プロ「日本語」の代表国立国語研究所水谷所長をはじめ，関西学院大学社会学部真鍋一史教授，吉備国際大学社会学部栗田真樹講師，国立国語研究所言語体系研究部中野洋部長など，多くの方々のご協力とご助言を頂いた。心より感謝する。また，本研究は新プロ「日本語」の研究費で行っている。

付録　調査の概要

「日本語観調査」は，調査の内容との関連性，各地域の特徴および代表性を考慮して，北京市(政治中心地)，大連市(日本とのつながりが深い地域)，西安市(内陸部)，ウルムチ市(少数民族地域)，唐山市(農村部)の５つの都市を選んだ。調査は２次にわたって実施した。第１次は95年１月10日から16日にかけて北京市で行われ，第２次は２月26日から３月10日にかけて大連市，西安市，ウルムチ市，唐山市で行われた。調査は割当法を採用し，大学，研究機構，官公庁，日系企業，住民委員会，農村などから18歳以上の男女1000人を対象に個別面接調査を実施し，778人から回答を得た(回収率は77.8%)。そのうち，日系企業従業員，日本語を勉強する学生，日本研究者など日本語学習者は調査対象全体の47.3%を占める。

「留学経験者調査」は1995年３月１日から15日にかけて，北京(102人)，上海(88人)と西安(35人)３つの都市で行われた。

質問紙調査は中国人民大学世論研究所によって実施された。そのほかに，国立国語研究所情報資料研究部江川清部長，米田正人室長が中心になって聴取調査が行われた。以上の調査は中国人民大学日本語学科，北京外国語大学，上海外国語大学，西安外国語学院，新疆記者協会などの協力を得ている。

8．劉志明「中国人の対日イメージと中日関係」『国際協力論集』第３巻第２号をご参照ください。

調査対象の構成 （%）

	日本語観調査	留学経験者調査
性別		
男　性	46.3	64.2
女　性	53.7	35.8
年齢		
10代	18.5	0
20代	48.3	38.2
30代	18.0	41.6
40代	6.5	15.2
50代以上	8.8	5.0
学歴		
小学校	1.4	0
中学校	8.7	1.1
高校	30.3	5.6
大学	57.3	88.7
その他	2.2	4.5
職業		
技能・労働職	8.6	1.7
商業・サービス職	1.9	2.8
専門職	14.9	41.6
企業管理職	5.0	5.1
公務員	4.9	3.9
会社員	14.6	21.3
学生	41.2	12.4
個人経営者	0.8	3.4
その他	8.0	6.1

The Internationalization of the Japanese Language Seen from the Surveys in China

Zhiming LIU *

Abstract

With Japan's advance of internationalization, the Japanese language is getting more and more popular throughout the world. However, at the same time some problems also arise therein. The research program, "Comprehensive Study on the Japanese Language in the International Community" carried out currently at the research expense of the Ministry of Education, Science and Culture, is to aim at clearing up these problems.

The main part of this program is focused on the research of "The International Census on the Status of the Japanese Language", which includes the surveys going to be made in about 30 countries. As part of the prepared surveys of the program, "The Research Survey on the Chinese View of the Japanese Language", and "The Survey of the Experienced Chinese Oversea Students to Japan" were implemented.

(1) The Japanese language education in China is in the second important position following English. People who study Japanese are mainly from the north-east and most big cities. The composition of the Japanese learners is very much different according to the areas, nationalities, as well as ages, education levels and occupations. Among which, the percentage of the young and high-educated are comparatively higher, and the Korean and the Mongolian are more than any other nationalities.

(2) The increasing exchanges between China and Japan, and especially the growing economy relations with more Japanese enterprises coming into China make the big differences between Japanese-speakers and non-Japanese-speakers in getting jobs, income and promotion in the areas where Japanese enterprises invest. Many people's motivation of studying Japanese, therefore, is rather for practical and economical use, which is vary

* Associate Professor, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University

different from English study in China.

(3) In high schools and universities, the number of the students who study Japanese as the first foreign language is going down, while the students choosing Japanese as the second foreign language are increasing. On the other hand, the number of Japanese learners of society is getting more than the students by going to language schools, adult education schools, and training centers in working places, etc. These education systems have been playing a large part in Japanese education in China besides the formal education. However, difficulties like lack of Japanese teachers and textbooks, etc. are still waiting to be solved.

(4) The target of many Japanese learners in China is to study in Japan. Thus the variations of the numbers of people studying in Japan have definitely an big impact on Japanese education in China. People who have the experiences of been studied in Japan actually help a lot both in the Japanese language education and Japanese Studies. However, even though most of the oversea students been to Japan satisfied with their study in Japan, many have had the language problem. According to the surveys, a lot of people could hardly follow the study in universities, or the special research due to the language problem which should be solved before coming to Japan. Regarding this problem there are actually many things that can be done to improve the present situation. For example, it is necessary for Japan to reconsider the policy of receiving foreign students, and furthermore to strength the language ability test system abroad, in order to accept only qualified people, and support them by supplying scholarship.

(5) The results of the surveys show that Chinese feelings to Japan is getting better via learning Japanese. As Chinese feelings toward Japan is not very good according to the surveys before, and besides people's concern about Japan is mostly on the economy and technology rather than on the culture, the spread of learning Japanese in China can be a bridge to help the two peoples understand each other better.